様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　5 月　20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５２０１８７
研究課題名（和文）　17・18 世紀都市ロマンス文学とその精神史に関する史的研究

研究課題名（英文）　A Historical Study of City Romance and Its Psychological Background in Seventeenth and Eighteenth Centuries

研究代表者
原　英一　（HARA EIICHI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40106745

研究成果の概要：

本研究では、「都市ロマンス文学」という概念を措定し、17 世紀から 18 世紀に至るイギリス文学の流れの中での、人間性と商業資本主義との連関を研究した。近代文明人が抱え込んだ理性と野性との葛藤は、王政復古期の貴族文化における「ウィット」が、新興市民階級の価値観である「センチメント」へ変容し、小説という新ジャンル創造へ向かう歴史的過程である。本研究では、文学ジャンル生成を惹起する都市文明の勃興と精神史の相関関係を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２００８年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：ロマンス、イギリス小説、ジャンル交替、近代商業資本主義、ロンドン、センチメンタリズム、市民道徳

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、過去十年間にわたって、16 世紀以降の近代イギリス文学の歴史を統一的に記述することを目的として研究を行ってきた。研究開始の動機は、長年行ってきたディケンズ研究であり、ディケンズにおける演劇的要素の探求であった。小説ジャンルそのものの生成・発展についての関心も同時に存在していた。最初に、小説ジャンルの始祖とされるデフォー(Daniel Defoe)やリチャードソン(Samuel Richardson)の作品の研究を行ったが、そこで明らかになったことは、これらの作品のすぐれて演劇的な特性である。小

説ジャンル勃興以前には、社会・文化的問題の表現媒体として、演劇が主流であったことは既に知られている。テクストの深いレベルで二つのジャンルの近似性が確認されたため、その後は王政復古期演劇の研究を行い、さらに遡って 1550 年以降の演劇を大量に渉猟していった。その結果、小説ジャンル勃興を惹起する文化的要因は、16 世紀後半以降の演劇作品に幅広く存在し、表現されていることが明らかとなった。

16 世紀後半以降のイギリス文学は、近代商業資本主義の発展と切り離して考えることはできない。この経済的状況は、都市とくにロンドンの急速な拡大・発展に最もよく表れている。人工の都市空間に囲まれて生活する近代人は、この時期に誕生した。それと同時に自然から隔絶されて、文明の中で、根源的自然性や欲望を抑圧しなければならないという、近代人特有の矛盾・葛藤が生じたのであり、それが近代イギリス文学の最大のテーマとなったのである。

このテーマの追求にあたって手がかりとなったのは、ロマンス文学の変容である。中世騎士物語を意味していたロマンスは、デッカー(Thomas Dekker)、ボーモント(Francis Beaumont)、ヘイウッド(Thomas Heywood)などの演劇作品の中で、「市民化」されていった。プロットや形式の点で従来のロマンスを踏襲しながら、市民の物語が展開することになったのである。研究代表者はこのようなイギリス近代文学を「都市ロマンス文学」と呼ぶこととした。この都市ロマンス文学は、前出の劇作家たちの作品やいわゆる「家庭悲劇」Domestic Tragedy のリアリズムを継承しながら、最終的には 17 世紀末から 18 世紀初頭にかけて、小説という新たなジャンルにつながることとなった。このような文脈で言えば、イギリス小説は都市ロマンスの完成形として捉えることができる。

平成 19-20 年度の科学研究費補助金による研究は、この長大な歴史研究の一環である。ここでは、とくに王政復古期から 18 世紀前半を中心として、都市ロマンス文学が歴史的に変化していく有様を、「ウィット」Wit から「センチメント」Sentiment へという、精神史的の中で捉えることを企図した。王政復古期貴族文化の精神的支柱であるウィットが、中産市民階級の台頭によって、その精神的優位をセンチメントに蚕食されていく様相を、当時のテクストの詳細な分析によって明らかにして、小説ジャンル勃興の精神史的背景を記述しようとしたのである。

２．研究の目的

本研究は、最終的には、ディケンズ(Charles Dickens)の小説を中心とするヴィクトリア朝文学、すなわちイギリス小説の最盛期の文学の本質を 1550 年代から 1850 年代までの 300 年間にわたるイギリスの演劇・小説の歴史の展望の中で捉えようとする長大な研究の一環である。ここで意図されているのは、第 1 には、ヴィクトリア朝を代表する小説家であるディケンズの文学が備えている基盤と背景を広大な歴史視野の中に位置づけることである。しかし、本研究をその一部として研究代表者が実施している研究の全体では、一人の作家の研究にとどまらない、より大きな目的が設定されている。それはすなわち、演劇と小説という、主要な 2 つの文学ジャンルの交替・生成・相克の中に、イギリス近代文学史の駆動原理とも言うべき根源的ダイナミズムを解明することである。従って、研究の歴史的範囲は、1550 年代から 20 世紀に及ぶものであり、多数の演劇・小説および中間的散文ロマンスを題材として扱うことになる。これは、国内・国外のいずれにおいても、前例のない企図であり、画期的な研究成果の期待されるものである。

平成 19-20 年度の二年間に実施される本研究においては、研究代表者のこれまでの研究を踏まえて、17 世紀後半と 18 世紀前半を中心として、都市ロマンス文学が発展し、小説の生成に至る過程を解明する。そこでは、文学の歴史的展開を推し進める内的な駆動原理として「センチメント」(sentiment)を措定する。これは貴族文化の「ウィット」(wit)に取って代わって、18 世紀英文学の精神的基盤となったものである。その背景には、言うまでもなく、17 世紀の革命の時代を経て、社会の主役となっていった中産市民階級が文化的ヘゲモニーを獲得していったことがある。遠くディケンズに至るイギリス近代小説の本質を解明する作業の一環として、このことを 17・18 世紀に限定して歴史的に検証することを目的としている。

３．研究の方法

本研究においては、次の５つの作業を並行して推進した。

(1) 王政復古期演劇における都市文化資料の収集

平成11年度以来の研究において、大量の一次資料文献を渉猟してきた結果、かなりのデータが蓄積されていた。それでもなお、本研究の基礎を一層強固にするためには、一般的に主要なテクストとされているもの以外に、さらに広範囲なデータの収集と整理を進めなければならなかった。冊子体及びファクシミリ等によるものの他、最近著しく充実してきた電子化資料を電子媒体に

より収集した。入手困難な電子データおよび冊子体データは他研究機関への出張により入手に努めた。

(2)都市文化（文学）の外形的及び内面的状況の分析

1　660年の王政復古を起点とする文化は、チャールズ二世の宮廷を中心とする貴族文化であった。とくに演劇において、その特徴が顕著に見られる。この時期の演劇を代表するいわゆる風俗喜劇(Comedy of Manners)はイギリス都市文化の最も華やかな表れのひとつである。演劇を中心としたテクストの詳細な分析によって、近代都市としての諸条件を備えつつあったロンドンの文化を多面的に分析した。そのために当時の政治史の文学的資料であるドライデン（John Dryden）の諷刺詩類（*Absalom and Achitophel, The Hind and the Panther,* etc.)及びピープス(Samuel Pepys)の日記も分析対象とした。

(3) 女優及び女性観客の文化的役割の解明

周知のように、王政復古期演劇と劇場閉鎖以前の演劇との最大の違いは、女優の存在である。少年俳優が演じる仮象としての女性ではなく、生身の女性が舞台に登場したことは、文化的に非常に大きな意義がある。ウィットが理性を基盤とするものであることは当然であるが、そのウィットによって女性を征服しようとする男性の動機は、人間の自然の欲望に根ざしている。この根本的矛盾が都市の文学としての風俗喜劇の内部に裂け目を生じさせ、やがて貴族文化そのものを崩壊に導くのである。一方では、台頭してきた市民（商人）階級の女性たちが劇場に観客として進出するようになり、18 世紀初頭には彼女たちを無視した演劇は成立しえなくなっていた。女性を中心とした舞台と観客席の相互作用を分析することによって、「ウィット」と「センチメント」の関係を明らかにする作業を行った。女優については多くの先行研究があるが、それら(Elizabeth Howe, *First English Actresses* 等)を参照しつつ、より広い歴史的パースペクティヴにおいて捉えることを試みた。

(4)　女性作家アフラ・ベインにおける演劇からロマンス（小説）へのジャンル転換の分析

史上最初の職業的女性作家であるアフラ・ベインは、女性の「ウィット」として特異な存在であるばかりではない。そのキャリアを辿ってみると、植民地・奴隷貿易との関係、さらには演劇から小説へのジャンル転換という文学史の根本問題に深く関わっていることが明らかになる。ベインについてはすでに平成 11ー12 年度の科学研究費補助金による研究において相当詳しく解明したのであるが、ここではさらに補足的な研究を実施する。とりわけ、ヘイウッド(Eliza Haywood)、マンリー(Delaviriere Manly)などの女性散文ロマンス作家との関連についての検討を深めることとした。

(5)センチメントと小説勃興に関する新理論の構築

センチメントの歴史的研究は、ブリッセンデン R. F Blissenden、プラーツ Mario Praz などが先行しているが、市民社会の精神史とジャンルの変容との関係で論じたものは少ない。演劇との関係で小説勃興を論じた Jones DeRitter, *The Embodiment of Characters* ぐらいである。小説勃興とセンチメント精神史との関連の研究は本研究の基礎として欠かせない部分であるので、独実の理論を構築することを目的とした研究を遂行した。この点についての研究には、マッキオン(Michael McKeon)、スペンダー(Dale Spender)などの研究書で多くの議論がなされている。それにもかかわらず、いずれの研究も依然としてウォット Ian Watt の優れた論考に及ばないように思われる。その原因は、16 世紀中葉まで遡るような広大な歴史的視野を欠いていることにあることは明らかである。本研究では、小説勃興についての既存の諸理論について、批判的に再検討を行った。「都市ロマンス文学」の歴史として、センチメントの精神史を位置づけることを行った。

４．研究成果

テクスト分析を中心としたこれらの作業の結果、「都市ロマンス文学」というジャンルを措定することの妥当性が明確となった。16 世紀後半から 18 世紀に至るイギリス文学の流れには、都市の拡張に端的に示される経済発展との密接な関連が認められる。騎士階級の文化であった中世的ロマンスが、都市すなわちロンドンの市民の中に浸透して、その文学形成の枠組みとなった。都市の住民としての近代文明人がその内側に抱え込むこととなった根源的矛盾、すなわち理性と野性との葛藤は、王政復古期の貴族文化の中でも鮮明に見られる。貴族文化の「ウィット」は、新興市民階級の価値観を組み入れて「センチメント」に変容する。その精神史的変容は、文化の表現媒体としてのジャンルに地殻変動を生じて、デフォー、リチャードソンによる小説ジャンル創造へとつながった。

こうしたジャンル交替の原動力は、革命の時代を経て政治的経済的ヘゲモニーを確立していった都市市民階級すなわち商業資本家階級の台頭を背景としている。エサレッジイ(George Etherege)、ウイチャリー(William Wycherley)、コングリーヴ(William Congreve)等の貴族主義的演劇は、ファーカ

ー(George Farquhar)やスティール(Richard Steele)の演劇に至って、市民階級および犯罪者までも含む登場人物によって、社会の広範な部分を表現するものとなった。しかし、ウィットからセンチメントへの重心の移動によって、演劇というジャンルが、中産市民階級の直面する諸問題を表現する文化的手段としてはもはや不十分であることは明らかであった。とくに、富裕化して男性と同様の知的教育を受けることになった女性たちは、かつてのエリザベス朝やジェイムズ朝の商人階級の女性たちとは異なり、「婦人部屋」に引きこもることとなり、商品の消費者であると同時に、自らが結婚市場での商品であるという、いわゆる「二重の商品化」の状況に置かれることとなった。これら女性たちの葛藤を表現する媒体として、ヘイウッド(Eliza Haywood)、マンリー(Delaviriere Manly)の散文ロマンスが生まれたのであり、アフラ・ベインの後期散文ロマンスでは、とくに『オルーノーコ』*Oroonoko* において、白人女性と黒人奴隷の根源的な同一性が提示されることになった。そこには都市ロマンス文学が、社会の変化に対応した新たなジャンルを生成するダイナミズムを備えていることが示されている。本研究では、こうしたジャンル生成を惹起する都市文明の勃興と精神史の相関関係を明らかにした。

さらに、本研究の付随的成果として、夏目漱石と 18・19 世紀英文学の関係に新たな局面を切り開くことになった。漱石の東京大学における講義録である『英文学形式論』、『文学論』、『文学評論』の全体にわたって見られる絵画と文学との関係を探求して、比較文化的研究や 19 世紀英文学研究への展望を切り開くことができた。これにより、本研究の出発点であったヴィクトリア朝文学、とくにディケンズ研究へ回帰するための重要な手がかりを提供することとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
①原英一、「小説家漱石、その語りの原点—ホガース、ドラローシュ、ミレイ」、『英語青年』、第 154 巻第 6 号、pp. 21-24、2008、査読無

〔学会発表〕（計０　件）

〔図書〕（計１件）
① 西條隆雄・植木研介・佐々木徹・原英一・松岡光治（編著）、南雲堂、『ディケンズ鑑賞大事典』、pp. 1-836、2007

６．研究組織
(1)研究代表者
原　英一　(HARA EIICHI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40106745

(2)研究分担者

(3)連携研究者